季刊

博物館だより

FUKUSHIMA MUSEUM QUARTERLY

URL http://www.general-museum.fks.ed.jp

81

夏の企画展

布の声をきく

福島県立博物館

庄内刺し子

夏の企画展

布の声をきく

会期　7月22日(土)～9月3日(日)

布の声がきこえる
いろんな姿をした布の声が
麻、からむし、木綿、絹、羊毛・・・
それぞれ別なふるさとから来た布たちの声が
裁つ　縫う　繕う
姿を変えながらも絶えることない声
耳をよせると布の語りかけがきこえてくる

姉の嫁ぎ先のおばあさんは機織上手。
手紡ぎ糸で布を織り、仕事着に仕立てました。

私たちはいろんな素材で布を作り、利用してきました。たとえば、麻やからむしといった草の繊維を巧妙に取り出したり、シナのような樹木の皮の薄い層を剥ぎ取りもしたのでした。一方、棉の実についているふわふわの綿毛を集めたり、羊をはじめとする動物の毛を刈り取ったり、そして昆虫である蚕の繭を使ったりしてきたのです。

今回の展覧会では、まず、布ができあがるまでの「素材」から出発します。さらに、できあがった布が「縫う」という作業を経て変身することにも注目します。主として日常は女性の手で行われる「裁縫」というものと、それをとりまく世界。裁縫の技術を教える様子を描いた色鮮やかな絵馬をはじめ、小さなエピソードに彩られた品々を紹介しながら、その入り口をちょっとだけ覗いてみることにします。

つぎは縫い上げられたさまざまな衣服。ここでは仕事着など、素材や形など地域の特徴をよくあらわしたものをご覧いただきます。刺し子、裂織り…。そして繰り返しつぎをあてた布。そこには心を奥底から揺さぶるような「美しさ」があります。

展覧会をとおしていろんな「表情」を見せてくれる「布」たちをぜひお楽しみください。

主な展示資料

麻、からむしの繊維を取り出す道具
綿繰り機
洋毛を刈るハサミ、紡毛機そして手紡ぎの毛糸
国見町鹿島神社「穀屋針子図」
福島市大蔵寺「針子図」
会津坂下町恵隆寺「塔寺小学校裁縫科生徒図」
南会津の刺し子袢纏
只見のぼろ刺し子
庄内刺し子
津軽こぎん
南部菱刺し
麻のかすの綿が入った夜着
裁縫雛形

会期中の関連行事

○記念講演会
日時　七月二九日（土）
講師　青森中央学院大学講師　田中忠三郎さん
演題　「北の衣の文化」

○体験講座
「からむしの糸作り」
日時　八月二一日（月）午前一一時～午後三時
講師　昭和村の織姫さん

○展示解説会
日時　七月二九日（土）講演会終了後
八月　六日（日）午後一時半
八月一四日（月）午後一時半
九月　三日（日）午後一時半

■夏の企画展《布の声をきく》は、平成一八年七月二二日（土）から九月三日（日）まで開催しています。
■観覧料　一般・大学生五〇〇円（四〇〇円）／高校生三〇〇円（二四〇円）／小・中学生二〇〇円（一六〇円）（　）は二〇名以上の団体の場合の料金です。

青森県の裂織り

裁縫のかご（青森県）

裁縫絵馬（国見町観音寺）

塔寺小学校裁縫科生徒図
（会津坂下町恵隆寺）

企画展「馬と人との年代記（クロニクル）」関連事業

◎記念公演会
平成一八年四月二九日（土）

「馬頭琴コンサート 白い馬」

演奏＆朗読・踊り
バヤラト＆サローラさん

馬頭琴を弾くバヤラトさんと熱唱するサローラさん

ゴールデンウィークの始まった四月二九日、中国内モンゴル自治区出身のバヤラトさん、サローラさんご夫妻をお招きして、馬頭琴コンサートを開催しました。博物館の講堂はほぼ満員となり、大勢の方々が馬頭琴の玄妙で美しい音色に耳を傾けました。

コンサートはバヤラトさんの独演に始まり、サローラさんによる『スーホの白い馬』の朗読、お二人による馬頭琴の共演と続きました。そして最後にはバヤラトさんの演奏にのせて、美しく着飾ったサローラさんがモンゴルの歓迎の踊りを披露してくれました。

バヤラトさんの演奏の中には「荒城の月」「ふるさと」「おぼろ月夜」などおなじみの曲も含まれており、なぜか妙に懐かしい馬頭琴の音色は、聞く人の心の奥に響いたものと思います。

日本に渡ってきた馬の祖先をたどると、おそらくモンゴルの馬にたどり着くと考えられています。モンゴルで作られた馬頭琴の音色は、長い時間を馬と共に暮らした人間の遠い記憶まで呼び覚ますのかもしれません。

◎記念講演会
～あなたも馬博士に～
平成一八年五月一四日（日）

「馬がウマれて日本にくるまで―ウマとヒトとのかかわりの古代史―」

講師　福島県考古学会副会長　穴沢咏光 氏

「ウマと人とはどこで出会い、どのようにして共に暮らし、そして日本へと渡ってきたのか。」今回の企画展の大きなテーマです。

このような大きなテーマに関して、会津在住の考古学者であり、汎世界的な考古学研究が認められ、京都大学人文科学奨励賞を受賞された穴沢咏光氏をお迎えして講演会を開催しました。当日は約一〇〇人の熱心な考古学ファンが集まり、多岐に渡る馬と人との奥深い歴史について聴講しました。

内容はまず生物学的な馬の話から始まり、約三万五千年前には食料として利用されていたこと、紀元前二千年頃には車を牽くための利用が始まり、馬車は軍事的に大活躍をしたこと、紀元前一千年頃には馬に乗る騎馬の風習が著しく浸透してきたことなど、幅広い問題を分かりやすく解説いただきました。

また、日本には縄文時代・弥生時代に馬がいた可能性は低く、馬は古墳時代の四世紀から五世紀の初めに日本に渡ってきたことを示唆されました。

講演では、馬は、人に飼われていなければ絶滅していたであろう動物であり、人はその絶大な力を利用してきたことにも触れています。その馬の力が機械へと置き換わった現在、馬も、そして人も、未来の姿はどうなっているのか、深く考えさせられる講演でもありました。

出番を待つ穴沢咏光氏

土器を使った塩づくり

Q&A

回答者
考古担当　髙橋　満

Q：塩づくりは縄文時代に始まったと聞きましたが、塩田のようなものがあったのでしょうか？

A：海に囲まれた日本列島では古来より海水を利用した塩づくりが発達しました。塩づくりが始まったのは縄文時代の後期後葉になります。当時海であった茨城県霞ヶ浦沿岸の遺跡ではこの頃の塩づくりの痕跡が数多く見つかっています。ただし縄文時代には塩田はなく、土器に海水を入れて煮詰める土器製塩法によって塩づくりを行っていました。塩づくりに使う土器を製塩土器と呼んでいます。

土器製塩法は塩田法による塩づくりが発達してくる平安時代後半には次第に衰退していき、一一世紀を迎える頃には製塩土器はほとんど見られなくなります。

Q：土器で海水を煮詰めれば塩ができるなんて簡単な方法ですね。

A：舐めると塩辛い海水ですが、含まれる塩分は約三パーセントに過ぎません。塩を得るには大部分の水分を蒸発させればよいので簡単な方法と思われる方も多いでしょう。ところが、実際に土器に海水を満たし、加熱してみても全くと言ってよいほど塩はできないのです。土器の器壁に塩分が吸収されてしまうこともありますが、海水に含まれる塩分は結晶化となるにはあまりにも少ないのです。そこで土器に海水を注ぎ足し注ぎ足し加熱するとようやく塩の結晶が土器の内側に現れてきます。ところがこの海水直煮の方法だと、時間と労力がかかりすぎることと、多量の燃料を消費してしまうという欠点があります。

近代以前は、海水を濃縮して塩分濃度の高い鹹水（かんすい）を作る工程（採鹹（さいかん））と実際に鹹水を熱して水分を蒸発させて塩を得る工程（煎熬（せんごう））によって塩を作っていました。これによれば燃料は煎熬の際にのみ必要となり、燃料の節約が可能になります。いわゆる塩田も採鹹のための施設になります。採鹹にはもちろん人力が必要となりますが、燃料を使わないことと太陽の熱や風といった自然の営力を最大限に利用する点でエコロジカルな工程だと言えます。

Q：土器製塩の頃の採鹹はどんなものなのですか。

A：土器製塩法の採鹹施設についてはよく分かっていません。ただし万葉集などには「藻塩焼く」「藻刈り塩焼く」などの表現があり、考古学的にも古代の製塩土器から海藻に付着する珪藻（けいそう）の検出があり、古代には海藻を利用した採鹹工程の存在が確実視されています。たとえば、乾かして表面に塩分のついた海藻を海水で洗い流す作業を繰り返して鹹水を得る方法などが想定されています。縄文時代でも茨城県上高津貝塚では製塩土器が出土した大型の炉から海藻付着性の珪藻遺骸がわずかに検出されており、海藻を利用する採鹹方法が縄文時代にさかのぼる可能性もあります。

Q：縄文時代の製塩土器にはどんな特徴があるのですか。

A：縄文時代の製塩土器は主に関東・東北の東日本を中心に見つかっています。とくに霞ヶ浦沿岸や宮城県の松島湾沿岸では実際に塩づくりを行った製塩遺跡があります。製塩土器は一回使うと壊れてしまうので、製塩遺跡からは多量に出土します。その量は通常の遺跡で出土する土器の何倍もの量になります。

製塩土器には文様がなく、形は深鉢形をしていて、比較的薄手に作られています。最大の特徴として、激しく加熱されているために器表面の剥落が顕著で、色調が複雑に変化していることがあげられます。

県内では製塩遺跡の調査例はありませんが、いわき市・南相馬市・新地町の遺跡で縄文晩期の製塩土器の出土が知られています。

また宮城県や山形県の内陸部でも製塩土器の発見があります。山形県のものは松島湾沿岸のものと同じ特徴を持っているので、松島湾沿岸から塩が製塩土器を容器として運ばれたことを示しています。

新地町三貫地貝塚出土製塩土器（館蔵）

研究ノート

馬をめぐるフォークロア

―猿牽を中心に―

佐々木長生　民俗担当

猿が馬を引く姿の絵札を厩に貼り馬の守護を祈る習俗は、南は九州から東北地方にいたるまで、津々浦々に広くみられた。また、猿のかわりに河童が馬を引くものもある。これらは、「猿駒引き」とか「河童駒引き」と呼ばれるものである。会津地方では、近世の風俗帳に、「猿牽」とか「厩祭」などと記述されている。なぜ馬と猿、もしくは河童なのか、現在の伝承では、明確な答はでていない。近世における会津地方の「厩祭」・「猿牽」について、文化四年（一八〇七）の『熊倉組風俗帳』（現在の喜多方市熊倉周辺）の記述から、当時の厩祭について紹介したい。

厩　祭　　猿引馬屋へ立寄て何か読事を唱ひ、馬形の絵と幣帛を切り、之を馬屋の柱にはり置申候、此祭りは亭主数次第にて家ごとに致す事無御座候、猿を引連れ家ごとに参り米をば少々づつ貰ひ申候、厩祭を頼み候へば三十文位出し申候、

この記述によると猿牽が猿を引き連れて厩に立ち寄り、馬の守護祈祷を行うとある。厩祭の記述が、貞享二年（一六八五）の風俗帳にほとんど見ることができない。文化年間ごろから流行したものか不明である。厩に猿の絵札を貼る習俗は、以前猿を厩に繋いでおき、守護とした名残のものであろうか。鎌倉時代の絵巻物等には、厩に猿が繋がれている光景が描かれている。

こうした習俗は、東北地方で広く行われてきており、相馬地方では「猿太夫」なる者が猿を引き連れ、馬の守護祈祷を行っていたことが、幕末期に編纂された『奥相志』に記述されている。また秋田県角館町では、烏帽子・直垂姿の猿太夫が厩の前で祈祷したという。猿牽は、猿が馬を引く絵を配り、それを厩に貼り馬の守護にするという習俗は、各地共通である。新潟県村上市周辺では、猿駒引きと聰善様の絵をくばり、馬守護を祈祷して歩いた。馬から牛の使用が多くなると、河童が牛を引く「河童牛引き」の絵を配ったという。

猿を引き連れ厩を祈祷して歩く人を、「猿太夫」とかはじめ、伝承などからもうかがうことができる。村上市の猿太夫は、「御祈祷札　猿太夫」なるお札を厩祈祷のおり、配っていたことがその版木から知ることができる。

「太夫」とは、会津地方では神主を呼ぶ呼称でもあり、猿を引き連れた神主という姿から呼ばれたのか、定かでない。南相馬市鹿島区の旧修験宅には、猿駒引きの版木が残されており、「猿太夫」による厩祈祷が行われていたことがわかる。

福島県内において猿駒引きの版木は、相馬郡飯舘村や新地町と田村市船引町などに存在している。新地町下真弓では葉山講のときに配り、船引町移では羽山祭に「絵馬飛ばし」といって、刷り込んだ猿駒引きの絵を飛ばしたという。鹿児島県では、ハヤマ祭に「河童駒引」の絵を配ったという。

「猿丸太夫」について注目すべき伝承に、「日光山縁起」と呼ばれる狩猟神の縁起由来がある。これは、「朝日長者」伝説ともかかわり、新潟県阿賀町鹿瀬実川の伝承が、『新編会津風土記』に詳細に記述されている。朝日長者の娘と有宇中将の子どもで、猿に似た醜い子どもであったことから、「猿丸太夫」と呼ばれた。猿丸太夫は弓の名手で、赤城の神と戦っていた日光の神を助けたことにより、狩猟の祖神として崇められるようになったという伝承である。この伝承は、南会津郡下郷町小野にもあり、実川は猿丸太夫の誕生地であるという。「日光山縁起」により狩猟を行う流派を、「猿丸流」とかサルマ流などと呼んでいる。下郷町小野では、その縁起由来を伝えている。また、相馬市黒木にも同様の「朝日長者」の伝承があり、それは『奥相志』に記述されている。また、いわき市遠野町にも「朝日長者」の伝承がある。

馬と猿との関係について、わが国でいつ頃から記述されてきたのか。平安末期の『梁塵秘抄』（一一七九）には、「御厩ノ隅ナル飼猿ハ、キヅナ離レテサゾ遊ブ」と、当時の習俗について詠われている。馬を引く猿の姿の絵は、永仁五年（一二九七）相模金沢称名寺の舎利塔基壇に描かれた戯画が、わが国では最も古いものとされている。また鎌倉時代の絵巻物には、馬の守護と思われる、厩に繋がれた猿の絵が見られる。特に、『石山寺縁起』の猿と馬の絵がよく知られている。また、『三二番職人歌合』には、猿回しと獅子舞が組で記載されている。猿回しが、すでに職人芸として市中で演じていたことがわかる。

これらの資料では、馬と猿との因果関係を記述しているものは、ほとんど見ることができない。管見の限りでは、北山観勝寺沙行嚮門作の『壒嚢抄』の文安二年（一四四五）一〇月一三日の条に、「猿ヲ馬ノ守スル事　猿ヲ馬ノ守リトテ馬屋ニ掛ルハ如何。猿ヲバ山父ト称シ、馬ヲバ山子と云バ、父子ノ義ヲ以テ守リトスルカ」とある。

岩手県では、「厩猿」信仰として前沢町や北上市などで、猿の頭蓋骨が保管されていることが報告されている。猿の骨を厩に奉納する習俗は、秋田県をはじめ東北各地にもある。先日、朝日新聞福島版（三月一五日発行）に下郷町で江戸時代の二軒の古い民家を解体したところ、猿の骨が見つかったという。それについての問い合わせの記事であったが、おそらくは馬の守護として厩に奉納されたものでなかろうか。会津地方の厩は、積雪寒冷地で母屋の中に設けられた内厩であるところから、そう考えることもできる。西白河郡西郷村や、いわき市三和などで、馬の守護に猿の頭蓋を厩に奉納される習俗が報告されている。

もともと猿牽は、馬の守護として村々を廻り歩き、厩の前で祈祷するものから猿回し芸のみが独立して、沿道で演じられるようになったものとみられる。猿回しが猿牽に系譜をたどることは、豊作を祈願した農耕図絵馬や農耕図屏風に描かれているところからもうかがえる。新潟県吉田町の赤坂諏訪神社の四季耕作図絵馬には、収穫時に三番叟姿の猿が猿回しの芸を演じており、その脇には鞭を持った猿使いも描かれている。須賀川市の農耕図屏風には、肩に猿を載せ農道を歩いている猿使いが描かれている。これらは、秋の収穫時に猿牽が厩祈祷に歩いていた習俗が、猿回しとなって絵馬や屏風に描かれているものと考えられる。農耕図に猿回しが描かれるのは、新潟県など日本海側の地方に多くみられる。

猿と馬との関係は日本のみならず、インド・中国・韓国などアジア各地にもみられる。おなじみの『西遊記』では玄奘法師を乗せた馬を引く孫悟空も猿、それにお供をする沙悟浄も河童である、ここにも馬と猿と河童の関係を海を越えて見ることができる。「河童駒引き」の絵も、馬の守護として厩に貼られている。

猿駒引き絵札（新潟県村上市）

トピックス

ちょっといい話し

【学芸員の公開授業から】

五月一一日・六月一日・二日の三日間にわたり、県立川口高校で「奥会津金山町の自然との暮らし」をテーマに佐々木学芸員による公開授業が二五名の三年生と約五〇名の地域住民参加のもと開かれました。この授業の中からちょっといい話しを紹介してみます。

会津木綿は今でこそ一般的ですが、昔木綿はとても貴重なものでした。だから、破れても捨てたりせず、刺す（糸で細かく縫う）ことによって丈夫で温かい着物にして長く使ってきました。しかし、この刺す技は次第に様々な模様を描き、より美しいものを目指すようになっていきました。これを刺子といいます。刺子の模様をよく見ると、そこには、麻の葉模様が多く見られます。古くから麻の葉は、厄除け（魔除け）に役立つものと言い伝えられてきました。つまり、麻の葉模様の刺子半纏を着ることで、身を守ろうとしてきたのです。また、刺子は女性の仕事で、女性は夫の身の安全を針に込め、夜なべをしてひと針ひと針刺したのです。このようなことから、刺子のことをネズサシ（寝ず刺し）などとも言いました。刺子には女性の愛が込められているのですね。

秋の企画展　開館二〇周年記念　予告

徳川将軍家と会津松平家

―葵の絆―

江戸幕府を樹立して泰平の世を生み出した徳川将軍家。三代将軍家光の弟である保科正之を藩祖とする会津松平家。この企画展は、両家ゆかりの資料を会津の地において一堂に展示・公開しようとするものです。

本展では、財団法人徳川記念財団の御協力をいただき、歴代将軍の肖像や自筆の書画、夫人の調度品、将軍家に伝来した古文書など、貴重な所蔵資料を展示させていただきます。同財団の資料が、東北地方で本格的に展示・公開されるのは、今回が初めてです。

これらに加えて、歴代藩主の肖像や将軍家より拝領の刀剣類など会津松平家ゆかりの資料を展示します。また、幕末の激動する政局の中で、孝明天皇が信頼の証として、両家にそれぞれ下賜した二通の御宸翰が、今回初めて揃って展示されることになります。

本展は、若松城天守閣郷土博物館と共同で開催する初めての企画展でもあります。どうぞ御期待ください。

徳川吉宗像（徳川記念財団蔵）

■秋の企画展《徳川将軍家と会津松平家》は、平成一八年九月三〇日（土）から一一月五日（日）まで

常設展示室「歴史・美術」テーマ展示

「墨の表現―水墨画いろいろ」
会期　六月二八日(水)から八月六日(日)まで

「花を描く・花を飾る―
花をめぐる絵画と工芸」
会期　八月八日(火)から九月二四日(日)まで

講演・講座

※は要申込

◎企画展関連行事
○記念講演会
「北の衣の文化」
講師　青森中央学院大学講師
田中忠三郎さん
日時　七月二九日(土)午後一時半～三時
○体験講座
「からむしの糸作り」
講師　昭和村の織姫さん
日時　八月二一日(月)午前一一時～午後三時
○展示解説会
講師　学芸員　榎　陽介　佐々木長生
日時　七月二九日(土)午後三時一五分～
八月　六日(日)午後一時半～
八月一四日(月)午後一時半～
九月　三日(日)午後一時半～
＊全て一時間程度

◎美術講座
※「やきものの本質を知る―
宗像窯で作るＭＹ茶碗２」
(会津美里町宗像窯)
講師　宗像窯八代目当主　宗像利浩さん
日時　七月一六日(日)午後一時半～三時
「近くで楽しむ博物館収蔵品ガイド４―
泰西王侯騎馬図屏風と蒔絵洋櫃」
講師　学芸員　川延安直　小林めぐみ
日時　七月二一日(金)午後一時半～三時
◎民俗講座
※「藍染めをやってみよう」
(南会津町奥会津地方歴史民俗資料館)
講師　奥会津地方歴史民俗資料館
学芸員　澤田けい子さん
日時　七月二八日(金)午前九時～午後四時
◎歴史講座
シリーズ会津藩②
「将軍家の元服儀礼と会津藩主」
講師　学芸員　高橋　充
日時　七月八日(土)午後一時半～三時
シリーズ会津藩③
「松平容保書状とその周辺」
講師　学芸員　阿部綾子
日時　八月一二日(土)午後一時半～三時
シリーズ会津藩④
「会津藩の諜報活動―
会義隊隊長の回顧録を読む」
講師　学芸員　木田　浩
日時　九月九日(土)午後一時半～三時
◎考古学講座
※「縄文土器をつくろう」
講師　学芸員　森　幸彦　高橋　満
日時　八月一九日(土)午前一〇時～午後三時
◎体験講座
※「昔話を語ろう」
講師　語り部　横山幸子さん
日時　八月六日(日)午前一〇時半～正午
※「おもちゃをつくろう
―まわり灯籠(とうろう)をつくろう―」
講師　展示解説員　小島明美ほか
日時　八月一四日(月)午後一時半～三時半
※「草木染め１」
講師　染織工芸家　山根正平さん
山根好子さん
日時　八月二六日(土)午前一〇時～午後三時
※「草木染め２」
講師　染織工芸家　山根正平さん
山根好子さん
日時　八月二七日(日)午前一〇時～午後三時
◎第四回
「『近世展示』を解剖する」
講師　館長　赤坂憲雄　学芸員　佐治　靖
日時　七月二〇日(木)午後一時半～三時
◎第五回
「会津のオンバさま」
講師　館長　赤坂憲雄　学芸員　榎　陽介
日時　八月一七日(木)午後一時半～三時
◎第六回
「戦争と人々のくらし」
講師　館長　赤坂憲雄　学芸員　関口　功
日時　九月二一日(木)午後一時半～三時

実演

場所　体験学習室

◎「昔語り」
語り部　山田登志美さん
日時　七月二三日(日)午後　一時半～三時
語り部　山田登志美さん
日時　八月二〇日(日)午後　一時半～三時
語り部　横山幸子さん
日時　九月二四日(日)午前一〇時半～正午
◎「三島の編組細工」
講師　伝統技術保持者　長谷川テル子さん
日時　七月三〇日(日)午後一時半～三時
◎「機織り」
講師　染織工芸家　山根正平さん
日時　八月一三日(日)午後一時半～三時
◎「紙芝居」
講師　紙芝居作家　五十嵐邦子さん
日時　九月一〇日(日)午後一時半～三時

木曜の広場

場所　講堂　入場無料

博物館再発見

はくぶつかんで遊ぼぉ！

場所　体験学習室

「七夕かざりをつくろう！」
日時　七月二日(日)午前九時半～午後四時半
＊展示解説員がご案内いたします。
＊時間内随時受付　所要時間二〇分程度

やさしい展示解説会

＊展示解説員による常設展の案内です。
＊毎週土曜日、日曜日の午前一一時と午後二時から三〇分程度行います。
＊なお、他の行事と重なる場合は開催いたしません。

＊その他、行事等の詳細に関しましては、月行事予定表やホームページをご覧ください。

常設展無料開放日

八月二一日(月)県民の日
九月一八日(月)敬老の日

七～九月の休館日

七月　三日(月)・一〇日(月)・一八日(火)・二四日(月)・三一日(月)
八月　七日(月)・二八日(月)
九月　四日(月)・一一日(月)・一九日(火)・二五日(月)

＊小・中学生、高校生は常設展を無料でご覧いただけます。

編集後記

この春、当館の庭では筍が大豊作でした。小さな竹林を芝生が包んでいるのですが、芝生の至る所から筍が顔を出していました。筍を蹴飛ばさずに歩くということが難しいほどでした。

庭の管理をしている造園業者の話によると、例年はまばらにしか出ない筍が一度にこんなに多く出たというのは、おそらく開館以来のことではないかということでした。筍だけに開館二〇周年の節目に合わせたメッセージなのでしょうか。筍の声援に応えられるよう頑張らねばなりませんね。

(すずき)

季刊博物館だより　第81号　2006年6月20日発行　編集・発行　福島県立博物館　〒965-0807 会津若松市城東町1－25　TEL 0242-28-6000　印刷　株式会社アポロ　会津若松市七日町14－7　TEL 0242-22-5139